

## 寄書

### 吾等の月次會

木炭の屑

水彩畫會研究所二月の月次會は二十三日午後より開會され出席者三十人程、陳列の繪畫は四十枚程であつた。この月は太平洋畫會の石井栢亭先生が來られて、一々親切な繪畫批評があつた。批評が濟んで着席してから、石井先生は所感として大要左の如き

談話があつた、曰く

近頃巴里ルーヴルにある名家のデッサンを集めたものを見た、デッサンであるから版でも着色畫よりは眞を傳へてゐる、それで見ると、人によつては組立つた一つの立派な繪よりも此デッサンの方が面白味が多いと思はるゝものが澤山ある、これは一つは材料の工合にもよるので、油繪や水繪では繪具を調合してゐるうちに、粘つたり何かしてそのうちに感興を失ひ易いが、木炭とか鉛筆とかになると、自分の考をづんづん描いてゆくことが出来るためであらうが兎に角このデッサンを見て感じたことは、

畫家として、何も必ずしも油繪で大作を描かねばならぬといふことはあるまい、繪の大小は元より問ふ處でなく、又其材料が油であらうと水彩であらうと墨繪であらうと構はない、何でもよいと思ふ、要は自己に尤も適した材料によつて、自己の感じた處を充分描き出しさへすればよいので、畫家であるから何でも大作を畫かねばならぬと思ふのは、囚はれた思想であらう、但展覽會等へ出品する繪は是は別物である。

次に繪は感興が大切である、感興を現はすには常に充分正直な寫生をして置くのは勿論であつて、一枚の繪の稽古に、正確の描寫といふことゝ、感興を現はすといふことゝ、同時には出來ぬであらうが、詰り繪は感興に重きを置くべきものといふ事を心得て置く、將來その方の繪を作るやうにされたい、私など出来る事なら、常に鉛筆とか木炭とか又は小さな水繪具とかを持つてゐて、何處でも何時でも、面白いと思つた、即ち感興を起した時直ぐに寫生をするといふ風にしたいと思ふてゐる、此處は面白いから此次寫生に來やうなんて、言ふてゐると

感興を失ふて仕舞ふ云々

次に大下先生のロンドンに於けるロードレートンスハウスを見た時の感として、立派な繪を作るといふことは順序さへ踏めば決して難事でないといふことを話され、それより所員有志の餘興に移りて薄暮散會したり。

### 我水彩畫の歴史 (下)

信濃土田 矢ヶ崎天民

雑誌の口繪よし、よそから送られた繪葉書よし身分で買ひ集めたものよるし、泰西の名畫であらうが何であらうがそんな事は問ふ處にあらず何でも彼でも一寸よいと視ればすぐそれが描きたい、描かなければ承知が出来ない、もう隙さへあれば畫だ。

雑誌を見ても一番先に見るのは畫だ。友人の處へ行つても先づ壁の畫を見る。それで氣に向いたのがあればそれを借りて來て描く。

花がよいと思へば花、風景あれば風景、人あれば人、犬あれば犬、美人あれば美人、牛あれば牛、寫眞あれば寫眞、模様圖案、山



河、草木、人、神、馬、牛、世界あるとあらゆる總ての物をかいた。

其製造力の偉大なることもまた驚くに堪へたりだ、少ない時でも二枚多い時には五枚位一日に描いたものだ。

それでいつも最後に描いたものが一番よく思はれた、初に描いたものよりは二番目がよく、二番目よりまた三番目がよくと言ふ様に順次によくなつてくる。であるから其得意思ふべしだ、其日出來上つたのは其晩友人のところへ持つて行つて鼻を高くする材料にする。

毎晩々々この様に御百度を踏むだ、其度に友は感心の角度を高めるばかりだから自分の畫熱も高まるばかりだ。

畫學校から歸つてから描くのでは時間が不足だと言ふので、こんどは晩まで描いた、食後の散歩も止め、友へ送る音信も出さないのでかいた、けれど晩かくことはどうも鱈目であることが明瞭であるから、それだけは一週間程で止めることにした。

こんな風でたちまち五六十枚の自筆繪葉書が出来た、之れを今になつて繰返して見る

と、抱腹絶倒むしろあはれな様なものである、これでも人からくれ給へなど言はれた事があつたがなかなか惜しくて人に呉れる處ではない、どうしてもやらなかつたが、今になつてみればそれがどの位幸だつたかしかない。

こんな下手なものを友の手に握られては孫未代までの耻辱になる様なものである。かゝるものを呉れ給へとはよほど苦しいおせじであつたと、今になつて御推察申す。繪葉書製造に着手したのが昨年九月初旬であつたが、十月の始頃には葉書では小さいと感じて、木炭紙を買つて來て、それを八つ切にして描いた、それから四つ切をかき、半切をかき、今年の一月には學校の休を利用して、木炭紙の全紙を描いた。

畫題は雪の朝と言ふので、原圖は繪葉書だ前の右の隅には冬木立が二本立つて居る一條の野川が、廣い廣い雪の野原の左の中間の隅から、畫の中央を曲り曲り、流れて木立のところへ來て岩の枯蘆と冬枯した梢との影を靜に寫して居る。廣い野原の向は雜木林の間々に人家が見える、中には常盤

木も三四本混じつて居る。

空は曉の色で、雪の野は一面に紫がかつて居る、野川の一筋は殊に其色が濃い。

これを仕上たときの嬉れしさは、とても筆紙のつくすところにあらずだ。

此頃は今迄のよろずやは止めて、風景一方に傾いてしまつたのである、それで、もはや製造額も頗る減少してしまつたと同時に畫について少しは考へる様になつてまた印刷したのはどうも面白くない、實際畫の活動だとか感だとか言ふものは、肉筆でなくは望むべからざることだと言ふことを知り初めたのも此頃だ。

始の中は色彩を御手本に似せようと苦心したのが、それがいつしか遠近を表はす苦心と變じて、それがまた光線の苦心となつたのも此頃だ水彩畫を充分やるには、鉛筆畫の基礎が堅固でなくてはならんと云ふのでまた鉛筆畫をやりだしたのも此頃であつた。

處が日記を探つて見ると。一月十三日神職會議所(上田横町にあり)に丸山晚霞先生の水彩畫展覽會があると言ふので、好機逸す



べからずとして行つてみた。

丸山先生の内筆及參考品として、丸山先生が歐米より携へ歸られた圖案、繪葉書、それに長野で開かれた講習會の成績品が重なるもので、大下先生河合先生のものも二三見受けられた。

此度博覽會へ出陳された夏の光麥焼く夕などもこのとき拜見した、尙かつて『みづゑ』の口繪に出た清境、其外駒鳥洪水の音、夏の野、花野後庭等數十の傑作を拜見して、只もう訝然として其入神の妙に驚き入つたのであつた。

これを拜見して大いに得る處があつたのは勿論であるけれども、それと共に精神的に一種の刺激を受けたのも事實だ。

それから一寸二月ばかり畫をかゝなかつた、驚いて自暴自棄したのではない、大いに活動すべく大いに黙したのである。

さて久しく黙して、將に啼かむとして筆を取つたのが、水彩畫を始めて第一番の戶外寫生だ、つまりそれは展覽會より得たる心の刺激によつて起きたのである。

大膽と言へば大膽、無法と言へば無法。

畫板に貼つた紙は木炭紙の全紙だ、場所は松尾城の殘壘に立てる杉並木。

日曜の朝飯を匆々に終へて、大なる希望を腦の中で考へて出掛けた。この寫生についての感想は頗る多い、先づ前夜からの用意と希望いよいよ現場へ行つてからの心持、

いろいろあるそれは他日に譲る。丁度正午まで三時間程で、鉛筆の下が描けた、それを家へ持つて來て彩色をする。

毎日二時間乃至四時間位宛かゝつて、一週間ばかりで出來上つた。それがまた頗る氣にいつてたまらない、とうとう額にまで仕立てた。これは今見てもよく思はれる。

それを手始として、烏帽子岳の殘雪（上田の東北方に聳ゆ）冬木立、夕暮の空やたらに、寫生した、爾後寫生と臨畫とかけるがはるやつてゐる。だんだんやつて居る中に腕は上達しないが心は驕つてゐる、先づ第一に紙が氣にくはぬと言ふのでケントをは

づむ、かく紙がよければ色がよくでる、次にワットマンをはづむ、なる程益々よい、次には繪具、繪具も高價のなら一層よい、こんな鹽梅で、技倆は高くならんが洛陽の紙

價は益々高くなる阿々。

去年四月廿日には、田舎の椋鳥博覽會見物に出掛けた、上野停車場で先づ見えるのが美術館、さあたまらない、翌日は第一番に美術館に舞ひ込むだ、そこでとうとう晝飯もせず二時頃まで居た。

見物をするところは博覽會のみならず、市内も歩きたい、友人の居所も訪はねばならん、横濱へも用事がある、それに廿五日には歸らねばならん、そのたしない中から美術館一つに二日を費した。

思ふに自分が畫を描かない時であつたならば、畫なるものに對してこれ程の興味と注意とを拂はなかつたであらう。

自然に對して感興を起し、また畫に對して其審美的境域に遊ぶことが出來得るのは、一に自分流とは云へ畫を習つた賜であると信ずるのである。

## 小言

草 水 生

○僕は田舎に居るうへ交際はうるさくて大嫌だから友と云ふものは殆んどない、何處